

## 回復期におけるトイレ排泄についての意識調査 ～早期より安全にトイレ排泄を行うための一考察～

○平川清華、古林幸子、古南美和子、近江和子

[はじめに]

疾患発症後早期にトイレ排泄を行う事は、身体・精神機能の改善につながる要因の1つであると思う。しかし、起き上がり・立ち上がりなどの基本動作のできない状態でトイレ排泄を行うことは転倒リスクを伴い、介助者には高い技術が必要となる。また、座位保持できない患者にトイレで常時付き添う事は、患者に多大なストレスを与え、スタッフも労力を要する。私たちはこのような状況で、トイレ排泄を行うことが望ましいのかと悩みながら取り組んできた。そこで当院では何を考慮してトイレ排泄を行っているかを知るためにアンケート調査を行い、回復期におけるトイレ排泄のアプローチについて考察した。

[対象と方法]

トイレ誘導に関わる職種（OT29名・PT36名・Ns53名・CW28名）を対象にアンケート調査を行った。

[考察]

回復期病院における早期トイレ排泄は、安全に行うを考慮しながらも、患者の能力の獲得・人間性の復古・在宅復帰をも含めたアプローチであることがわかった。また、回復期病院の特徴としてトイレに行きたいという本人の意思・希望・尿便意の有無などQOLに関してより考慮していることも示唆できた。多くの要素を考慮しながら多職種がチームとして個別のアプローチ方法を考え、日々の生活の中で繰り返し行っていくことで、早期排泄自立、更にはADLの早期拡大につなげることができると考える。

## 回復期リハビリテーション病棟での昼夜排泄 状況の相違

○多田裕子、境谷恭子

[はじめに]

疾患により障害を持った患者の排泄動作の自立は、退院の転帰先に大きな影響を与える。昼夜の排泄の相違を検証し、患者・家族への排泄動作の指導に役立てたい。

[対象と方法]

H21年12月～H22年1月に当病棟入院中の患者47名に対し、①昼夜と夜間の排泄状況 ②疾患別 ③排泄状況の違いの原因の比較・分析を行った。

[結果]

47名中、①脳血管障害患者25名：昼夜の差がある患者5名の内、昼夜は自立も夜間はオムツ使用1名、昼夜トイレ介助夜間オムツ使用4名 ②整形疾患患者18名：昼夜の差がある患者4名の内、昼夜見守り夜間一部介助1名、昼夜トイレ介助夜間オムツ使用3名であった。昼夜の違いがある患者は12名で夜間の睡眠により、尿意が不明瞭であることが原因となっていた。

[考察]

排泄行為はADLの中で特に羞恥心にも関係する項目で、できる限り自分自身で行いたい項目のひとつである。昼夜の排泄動作の差をアセスメントし、適切な方法での援助を考えていく必要がある。昼夜の排泄行為を自立出来るように取り組むことが、ADLの拡大につながり、QOLの向上させると考える。